

OSAKA MUSEUMS

vol.9 TAKE FREE

時間。 過ぐす 集



大阪市内
5ミュージアムの
スケジュール&トピックス

3月—5月
2019

大阪歴史博物館 9階
「天下の台所の時代 浪花まちめぐり」



※成り年度 文化庁 地域の美術館・歴史博物館を中核としたクラスター形成事業

OSAKA MUSEUM S SCHEDULE & TOPICS 3月-5月

※金額表記のない展示などは、常設展示観覧料でご覧いただけます。
※すべての施設は、中学生以下・大阪市在住の65歳以上の方（一部、特別展を除く）、障がい者手帳等をお持ちの方は無料です。
※団体割引などがある場合があります。詳細は各施設にお問い合わせください。

	3月	4月	5月	
大阪歴史博物館	<p>1/26-3/17</p> <p>特集展 はにわ大行進 —長原古墳群と長原遺跡— 平野区の長原古墳群から出土した埴輪を一堂に集め、5世紀の大阪に暮らした人々の生活・生産・交流に迫ります。大人1,000円、高校生・大学生700円</p> <p>http://www.mus-his.city.osaka.jp/</p>	<p>3/20-5/6</p> <p>特集展示 なにわ人物誌 三好木屑 近代大阪を拠点に活動し、今なお大阪の茶人たちに愛される指物工・三好木屑(1874~1942)の事績を多彩な作品を通して振り返ります。</p>	<p>5/8-7/8</p> <p>仁清写鶴香合 三好木屑作(個人蔵)</p>	<p>大阪市中央区大手前4丁目1-32 tel. 06-6946-5728</p>
大阪市立自然史博物館	<p>開館時間/9:30AM~5:00PM (11月~2月は4:30PMまで) ※入館は閉館の30分前まで 休館日/火曜(祝日の場合はその翌平日) 常設展示観覧料/大人300円 高校生・大学生200円 http://www.mus-nh.city.osaka.jp/</p>	<p>3/23・3/24</p> <p>はくぶつかん こどもまつり 大学生ボランティアと共に、クイズや工作で遊びながら、博物館と一緒に楽しみましょう。※高校生以上の付き添いの方は常設展示観覧料が必要です(11:00AM~4:00PM)</p> <p>講演会 OSL年代 4/20 —砂粒に刻まれた時の記憶— 「地質の日」を記念して、自然史博物館では、毎年講演会を行います。 ※高校生以上の参加は常設展示観覧料が必要です(3:00PM~4:30PM)</p> <p>子どもワークショップ</p>	<p>大阪市東住吉区長居公園1-23 tel. 06-6697-6221</p>	
大阪市立東洋陶磁美術館	<p>◎改修工事のため 2/12~3/31は休館</p> <p>開館時間/9:30AM~5:00PM ※入館は閉館の30分前まで 休館日/2/18、2/25、3/4、3/11、3/18 ※3/19~5/12まで無休 コレクション展観覧料/一般300円 高校生・大学生200円(特別展は別料金) http://www.moco.or.jp/</p>	<p>4/6-6/30</p> <p>特別展 文房四宝—清閑なる時を求めて— 中国の文人を魅了した文房四宝の世界を、日本有数の文房具コレクションから約150点の作品で紹介。一般1,200円、高校生・大学生700円</p> <p>4/6-6/30</p> <p>特集展 朝鮮時代の水滴</p>	<p>堆朱 貝利文筆 (個人蔵)</p>	<p>大阪市北区中之島1-1-26 tel. 06-6223-0055</p>
大阪市立美術館	<p>開館時間/9:30AM~5:00PM ※入館は閉館の30分前まで 休館日/2/18、2/25、3/4、3/11、3/18 ※3/19~5/12まで無休 コレクション展観覧料/一般300円 高校生・大学生200円(特別展は別料金) http://www.osaka-art-museum.jp/</p>	<p>2/16-5/12</p> <p>特別展 フェルメール展 17世紀のオランダ絵画の黄金期を代表する画家、ヨハネス・フェルメール。日本初公開となる「取り持ち女」や、大阪展でのみ展示される「恋文」など6作品を中心に展示します。一般1,800円、高校生・大学生1,500円</p> <p>コレクション展 花香鳥語—中国明清の絵画— 中国明清時代の院体画・文人画に描き出された花や鳥の華麗な競艶をお楽しみください。4/6-5/12</p> <p>コレクション展 おおさかの仏教美術 2 当館がお預かしている大阪府下の寺社の文化財の数々をご紹介します。シリーズ第2弾。4/6-5/12</p>	<p>ヨハネス・フェルメール 《手紙を書く女》</p>	<p>大阪市天王寺区茶臼山町1-82 (天王寺公園内) tel. 06-4301-7285 (なこホール)</p>
大阪市立科学館	<p>◎3/30にリニューアルオープン 開館時間/9:30AM~5:00PM ※展示場入場は4:30PMまで ※プラネタリウム最終投影は4:00PMから(土・日・祝などは5:00PMから) 休館日/月曜(休日の場合はその翌平日) 展示場観覧料/大人400円 高校生・大学生300円 プラネタリウム観覧料/大人600円 高校生・大学生450円 3歳以上中学生以下300円 http://www.sci-museum.jp/</p>	<p>3/30-6/2</p> <p>プラネタリウム 星の光景ベスト10 新プラネタリウムで、地上で体験できるベスト10の星の光景を再現。生解説でそのすばらしさを紹介します。</p> <p>プラネタリウム 宇宙ヒストリア—138億年、原子の旅— あなたの体の中にあるおびげんい数の原子。そのなかのひとつの酸素原子があなとに宇宙の歴史を語ります。</p> <p>サイエンスショー ロケット!ロケット!ロケット! リニューアルオープンを記念して、いろいろなロケットをたくさん打ち上げます!ロケットが飛びまわります!科学しましょう。</p>	<p>星の光景 ベスト10</p>	<p>大阪市北区中之島4-2-1 tel. 06-6444-5656</p>

大阪の



POINT

窓と反対側には天皇が座する高御座を鏡面に描き、空間が約2倍に感じられるよう工夫されている。また、格式の高い建物であることから、柱の太さは一律70cm級。床の塀は奈良時代の建物を参考に、柱に対して目地が平行な「布敷き」となっている。

大阪歴史博物館は、ラゲビーポールのような紡錘形の平面形が印象的な建物だ。各フロアの展示室は紡錘形を縦に中央で分け、一方を復元模型や映像でその時代を再現する「概

「その時代に

7階 | 近代・現代フロア

7階には懐かしい昭和の風景が広がっている。「大大阪」と呼ばれた時代の新しいメインストリート、御堂筋を南へ歩いていこう。

「歳末大売出し」の札が踊るのは昭和15年(1940)末の公設市場。「歳末ですから、お節料理に使う海老芋や百合根が並んでいます。大阪の伝統野菜の勝間南瓜や天王寺蕪、田辺大根もありますよ」と学芸員の船越幹央さん。モデルとなった市場の古い写真を元に忠実に再現したという。

洋服姿の女の子とお母さんが、ショーウィンドーを覗き込んでいるのは心齋橋筋。学芸員の澤井浩一さんによれば、「当時は心齋橋筋でウィンドウショッピングをすることを「心づら」、道頓堀で芝居の看板を見て歩くことを「道づら」と言ったんです」。看板を見上げる人形と共に「道づら」気分を味わおう。

POINT

展示の裏の裏までも再現するのが歴博の展示。青果店や鮮魚店のバックヤードには品物のストックまで。歌舞伎役者の名を入れた「まねき看板」からは角座の看板がわずかに透ける。人形たちの着物は時代考証済みのアンティークだ。

ら、一つひとつの資料への興味の扉が開いてゆくように、博物館自体が設計されているのだ。10階「古代フロア」から始まり、9階「中世・近世フロア」、7階「近代・現代フロア」と時代とともに階を下る。フロア間のエスカレーターからの大阪城天守閣もお見逃しなく。大阪歴史博物館でしか見られない絶景だ。

「誰か」の存在を感じることが古代の土器に残る手仕事感、古文書の文字の息づかい。それに触れていた「誰か」の存在を感じることが古代の土器に残る手仕事感、古文書の文字の息づかい。それに触れていた

9階 | 中世・近世フロア

9階「天下の台所の時代」に入ると、カーペットが青色になり、そこはもう安治川という設定。川を上って水都を一巡するしよう。

まずは、大工さんの手仕事の跡が残る大きな2つの木橋がお出迎え。江戸時代の大阪を代表する安治川橋、難波橋である。それぞれの橋がかかる堀川の近くには、大阪の三大市場があった。「雑喉場の魚市、堂島の米市、天満の青物市です。堂島の米市は世界に先駆けて先物取引を発明したと言われているんですよ」と学芸員の豆谷浩之さん。橋の間を歩いていると、水運を活かして日本中から品物を集めていた、天下の台所の風景が浮かび上がってくる。



POINT

9階フロアの水先案内人である文楽人形の浪花屋寅之助の声は、歌舞伎俳優の片岡愛之助さん。また、街のにぎわいは、江戸時代の芝居の舞台で使われた「立版古」という立体的な手法で表現されている。

10階 | 古代フロア

10階でエレベーターを降りると、「難波大阪」と刻まれたレリーフがドンと現れる。まずはその裏にあるガイダンス映像を見よう。そして、このフロアの「概観」である「宮廷儀礼の世界」に進むのは、展示室が暗転するタイミングを狙ってほしい。

暗闇に浮かび上がるのは、天平16年(744)2月26日、後期難波宮の大極殿(正殿)内部。等身大サイズの女官と侍従の人形が整列するなか、「難波宮を都にする」という聖武天皇の勅命を左大臣橋諸兄が宣言する4分間の映像が流れる。

光が射すと、眼下に広がるのは映像で描かれていた難波宮だ。「外が見える8分の間に、映像と難波宮跡公園を頭の中で合体してほしい」と学芸員の李陽浩さん。合計12分間の古代トリップはクセになる。つい、もう一度暗くなるのを待つ来館者も少なくない。

身を置く。

Information

大阪歴史博物館

フロアごとに時代が分かれており、今回紹介していない8階は「歴史を掘る」フロア。原寸大に再現された発掘現場で、考古学の調査方法、遺構や遺物の見方を学べる。また、学芸員・ボランティアの案内により博物館地下に眠る難波宮遺跡探訪も開催(開館日の1日6回)。大阪の各時代を体感できるよう、とことんこだわっている。

長く いられるには 理由がある。

● 大阪市立東洋陶磁美術館

すべての展示室のケースのサイズと高さはほぼ同じ。その中を均一に照らすのは、限りなく外光に近い高演色LED。ガラス質の釉薬に覆われたやきものの表面が、光を反射しないように細心の注意が払われている。特に光の影響を受けやすい青磁のうち宋時代の代表的な作品は、自然光を取り入れた専用のケースで展示。移り変わる光のもとで微妙に変化する釉色を鑑賞できるのだ。

「展示ケースの高さや奥行き、照明器具の選び方、光の当て方などによって、作品の個性が際立ち、一点一点の違いがわかるように工夫しています」と学芸員の野村恵子さん。確かに展示室では一つひとつの作品の存在が際立ち、だからこそ見入ってしまう。人が少ない時であれば、ケース前の手すりに肘をつけて心ゆくまで眺めていられるのもありがたい。

さらに、地域ごとのやきものの特性に合わせて、展示室ごとの雰囲気



Information
大阪市立東洋陶磁美術館
明治～大正期の名建築も多い中之島に立地、周辺散策とセットでゆとりと過ごしたい。4月5日(金)までは館内改修工事・展示替えのため休館中。



も異なっている。日本陶磁室は座敷で器を鑑賞しているような演出。大ぶりで力強い華やかさのあるものが多い中国陶磁室は天井は5mと高く、明るい光に包まれている。一方で青磁や白磁を中心とする韓国展示室は天井が低く、照明も落とされている。

「基本的な順路は示していますが、展示室を行き来しながら作品を見比べ、自由に鑑賞していただける建物の構造になっています」と野村さん。何度も通い詰めてお気に入りコースをつくりあげてみてください。

リアルな星空体験をより快適に。 大阪市立科学館がリニューアル!

3月30日にリニューアルオープンする大阪市立科学館。プラネタリウムホールでは新しい投影機「インフィニウムΣ10S AKA」がデビューする。電球が高輝度LEDに変更され、星の明るさを表現する精度がぐんとアップ。肉眼で見られる1等星から6等星までの違いをはっきりと認識できるようになる。



また、端にあった座席24席を中央に移動。星空がより正確に見える座席を増やし、快適性を高める。その他、階段の高さを均一化し、通路を広くするなど、安全のための改善も加えている。

リニューアルに関わった天文担当学芸員の西野藍子さんは「プラネタリウムに来てもらうことがゴールではない」と語る。「宇宙により深く興味を持ってもらうことを目指しています。プラネタリウムもその第一歩です。だからこそ、肉眼で見られる星の数(9000個)や明るさにこだわりたい、華やかさよりもリアルを追求しています」より過ごしやすくなった星空体験をお楽しみに。

ミュージアムの外のお楽しみ。

● 大阪市立自然史博物館「ネイチャースクエア」

大阪の三方を囲む北摂・金剛・生駒・和泉の山地、千里や羽曳野の丘陵、大阪湾や淀川の水辺……。大阪市立自然史博物館の「ネイチャースクエア」大阪の自然の多様性に改めて驚く。

「一見すると生き物がいなさそうに思われる、開発が進んだ場所でも自然観察はできます」と学芸員の横川昌史さん。「大阪中、心部でも、天王

寺など上町台地のへりには樹林が残っています。身近な公園などにもさまざまな生き物が暮らしています。港に近い埋立地では、珍しい外来生物が見られることもあるんですよと話す。

展示には、自然観察地図が付いている(P7参照)。自然のことは自然の中で学ぶのが一番。展示を見た後は、フィールドに飛び出そう!



Information
大阪市立自然史博物館「ネイチャースクエア」
隣接する「自然の情報コーナー」には、学芸員が厳選した自然史関連図書がズラリと並ぶ。心憎いのは「STUDY NATURE, NOT BOOKS」の貼り紙。フィールドに重きを置く思いが表れている。



● 難波宮跡公園

『日本書紀』に「その姿は、言葉に尽くせないほど素晴らしい」と讃えられた難波宮は、長らくその所在が謎とされていた。江戸時代から続く論争に決着をつけたのは、昭和29年(1954)に始まる山根徳太郎博士らによる発掘調査だ。「苦節7年、昭和36年の第13次調査で、ついに後期難波宮の大極殿階段跡を発見したので」と大阪文化財研究所の

積山洋さん。その後も、数々の発見が古代史を塗り替えていった。ところが、大阪中、心部に位置する難波宮の保存は簡単ではなかった。「市民や研究者らによる熱心な保存運動によって、約14万5000㎡が国の史跡に指定されたのです」。復元された大極殿基壇に立ち、中大兄皇子や聖武天皇が見ていた景色に思いを馳せてみよう。



Information
難波宮跡公園
難波宮跡公園は大阪歴史博物館から徒歩3分。前期(飛鳥時代)・後期(奈良時代)の回廊や朝堂跡などの遺構は、植え込みやタイル敷きなどで復元されている。歴博10階の映像で貴族が整列していたのは朝堂院と呼ばれる中央の広場。なお、大阪文化財研究所が編集した難波宮パンフレットが大阪歴史博物館にて配布されている。



お仕事

大阪市立美術館

昭和11年(1936)開館。敷地は茶臼山の一角。住友家の本邸のあった場所で、慶沢園とともに寄贈された。さまざまなジャンルの特別展を開催することにも、世界的に名高い阿部コレクションをはじめとする所蔵品は、質量ともに充実した内容を誇り、独自の企画によるコレクション展は海外からも注目されている。

大学生の頃、文様への興味からやきものを専門に勉強し始めましたが、見れば見るほど、調べれば調べるほどやきものに愛着が湧いてきました。

やきもの多くは、絵画や彫刻とは異なり、人間が道具として「使」つためにつくられたものです。色や文様、質感、フォルムなど美術的な観点から鑑賞する楽しみのほか、誰がどのように使ってきたのだろうか?と、その製作や使用の背景をたどりながら鑑賞するのも、暗号を解読するような楽しさや、タイムカプセルを開けるようなワクワク感があります。

やきものを見る時に「自分なり何を盛り付けようかな?」「どうやって使おうかな?」と想像してみるのは、おすめの鑑賞方法の一つです。たとえば、この「色絵毘沙門亀甲文皿(写真真右側の作品)」ならどうでしょうか? 全面が赤・黄・緑・青で彩られ、図柄の主張が強い作品ですから、料理によつては喧嘩をしても構いません。そこで懐紙を敷いて天ぷらを盛ったり、ハランや笹の葉を敷いていなり寿司やおにぎりをのせたりしてみてもいい。ちらりと

覗くお皿の華やかな文様が、いつもよりじっくり鑑賞するきっかけとそつです。こんな風に想像を膨らませながら見ていくと、作品が身がします。

「何を盛ろうかな?」と想像してみると、やきものをみるのが楽しくなりますよ。

学芸課 学芸員 陶磁担当 杉谷香代子さん



こちらで働く以前は東京のやきもの専門の美術館に勤務していました。来館者はやきものが好きな方がほとんどで、展示した作品に興味を持ってもらえることが当たり前でした。ところが、大阪市立美術館ではさまざまなジャンルの特別展やコレクション展が同時に開催されるため、やきものに特別な関心がない人の方が圧倒的。初めてコレクション展を担当した時は、素通りされる方が多くてショックでした(笑)。

そこで、昨年末に企画した鍋島焼のコレクション展では、立ち止まって展示に目を向けてもらうため、まっすぐに歩けないよう展示ケースのレイアウトを工夫してみました。また、解説を付ける作品の割合を増やすことで学びたいという気持ちを促す工夫も。そのおかげか、以前よりも長い時間立ち止まって鑑賞してくださるお客様が増えたように思います。

充実したコレクションが揃った館ならではの悩みですが、どうすればより多くの方にやきものに興味を持ってもらえるだろうと日々考えています。

リレーエッセイ MUSEUMS TRIBUNE

第5回 橋本麻里さん(ライター・編集者)

illustration : Kyoko Yamakuni

訪れるたび、畏敬の念に圧倒されるのが、大阪市立東洋陶磁美術館だ。近年の企画展を振り返つても、「高麗青磁―ヒスイのきらめき(2018年)」、「唐代胡人俑―シルクロードを駆けた夢(2017〜2018年)」、「台北國立故宮博物院―北宋汝窯青磁水仙盆(2016〜2017年)」など、毎年目をみはるような重量級の展覧会が続く。また「新発見の高麗青磁―韓国水中考古学成果展(2015年)」、「北宋汝窯青磁―考古発掘成果展(2009〜2010年)」のように、発掘品を含む最新の研究成果を、観客の興味をそそる展示となるよう工夫を凝らしながら紹介し続けているところも頭が下がる。

益田孝(鈍翁/三井物産)しかり、原富太郎(三溪/帝國蚕糸)しかり、松永安左エ門(耳庵/東邦電力)しかり。企業人としてもコレクターとしても、いずれ劣らぬ個人的な面々だが、現代日本で彼らのようなコレクターを探すのは難しい。経済状況や税制、そして経営者や企業の方が変わるにつれ、彼らに比肩する大コレクターを一個人が築くことは、限りなく不可能に近くなつてしまった。

そんな近代個人コレクション最後の高峰と言えなのが、安宅英一の収集した東洋陶磁器のコレクションだ。鈍翁や耳庵らのコレクションが、主に茶の湯との関わりの中で形づくられたのに対して、英一は中国・韓国の陶磁器を、陶磁史に沿って系統的、網羅的に蒐集、各ジャンルそれぞれに超一級作品を含むよう意を尽くした。

とはいえ、経営者としての側面から安宅英一を評価するならば、採点は辛くならざるを得ない。戦前から戦後にかけて、日本十大総合商社の一角として最大売上高2兆6000億円を誇る大企業であった安宅産業が、その放漫経営と英一ら「安宅ファミリー」による企業私物化によって、昭和52年(1977)に伊藤忠商事に吸収合併されるにいたる崩壊の過程は、NHKドラマ「ザ・商社」や、



コレクションが世に問うもの。



TBSテレビドラマ「岸辺のアルバム」の題材となった。膨大な蒐集品も、安宅が社内で作った「美術品部」が、利益の社会還元と従業員の教養向上を大義名分に購入したもので、破綻時に出した2000人近い退職者、2300億円という不良債権の額を考え合わせれば、単純にコレクターとしての審美眼の高さや構想力を讃美するだけ、というわけには行かない。

それでも破綻後、文化庁をはじめとする各方面からの要請を受け、コレクションを負債の担保としていた住友銀行から住友グループが一括して引き取り、美術館の建物までつけて大阪市に寄付した。今日まで大コレクションを散逸させることなく残り、本当の意味で市民に開かれたものとした企業の見識は、賞賛に値する。東洋陶磁美術館は、優れた展示を見に行く文化施設というだけでなく、個人や企業が美術品をコレクションすることの意味、またそれをいかに社会へ還元していくのかという、日本ではなかなか議論が深まりにくい問題を考えるための、大きな手がかりを与えてくれる館でもあるのだ。

はしとまり、ライター、エディター、公益財団法人水青文庫副館長、日本美術を中心に伝統芸能、古建築など幅広いジャンルを網羅。雑誌「BRUTUS」の特集をはじめ、「読者者」にわかりやすく専門知識を伝える事故に定評がある。著書に「京都で日本美術をみる(京都国立博物館)」、共著に「SHINGART」など。編著に「橋本麻里の美術」として日本の歴史(全3巻)、「日本美術全集(全20巻)」ほか。

【地方独立行政法人】

大阪市ではこれまで指定管理者制度により、大阪歴史博物館・大阪市立自然史博物館・大阪市立美術館・大阪市立東洋陶磁美術館の4館は大阪市博物館協会に、大阪市立科学館は大阪科学振興協会にそれぞれ運営を委ねてきました。しかし、この制度のもとでは人材の確保や活動の継続性を守る上で課題があることから、運営方法の見直しを図ることとし、まず2016年12月に、外部有識者の意見とパブリック・コメントを踏まえて「大阪市ミュージアムビジョン」を策定しました。

このビジョンの効果的な実現をめざして、館を一体的に運営するため、新たに地方独立行政法人大阪市博物館機構を設立することとなりました。2019年4月1日からは同機構が、5館に加え、2021年度に開館する予定の大阪中之島美術館の運営も行うことになりました。

地方独立行政法人化によって博物館の魅力向上を図り、より多くのみなさんにご利用いただくとともに、都市大阪の活性化に貢献することが期待されています。また、博物館機構の新理事長には「R西日本の真鍋精志会長をお迎えします。新たな体制のもと、ミュージアムビジョンに掲げる「都市のコアとしてのミュージアム」の実現を目指します。

ここにしかありません。 大阪市立自然史博物館の「自然観察地図」

海へ、川へ、山へ――。自然観察の力強い味方になってくれるのが大阪市立自然史博物館のミュージアムショップ。自然観察の道具や図鑑、博物館オリジナル制作のミニガイドなど、厳選された自然史グッズが並びます。「ネイチャースクエア〜大阪の自然誌〜」(P5)に展示されている「自然観察地図」(各900円)も販売中。北大阪編、南大阪編それぞれ18コースを収録。いざ、地図を片手に大阪の自然探索へ出かけよう!



OSAKA MUSEUMS vol.10 2019年夏頃発行予定

「OSAKA MUSEUMS」では、大阪歴史博物館、大阪市立自然史博物館、大阪市立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪文化財研究所、大阪市立科学館を中心として、大阪市博物館・美術館の魅力と情報を紹介しています。

主な設置場所：大阪市内の各種情報センター、交通施設、文教施設、観光事業者、ホテル、複合商業施設、区役所ほか

2019年2月20日発行 発行：公益財団法人大阪市博物館協会
〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32 大阪歴史博物館内 tel. 06-6940-0550
企画・編集：株式会社140B 撮影：西岡潔(大阪歴史博物館、大阪市立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館)
浜田智則(大阪市立自然史博物館、難波宮跡公園)
デザイン/ツムラグラフィック 中務慈子 取材/杉本恭子 藤谷うらら